

# 大宰府研究の現在

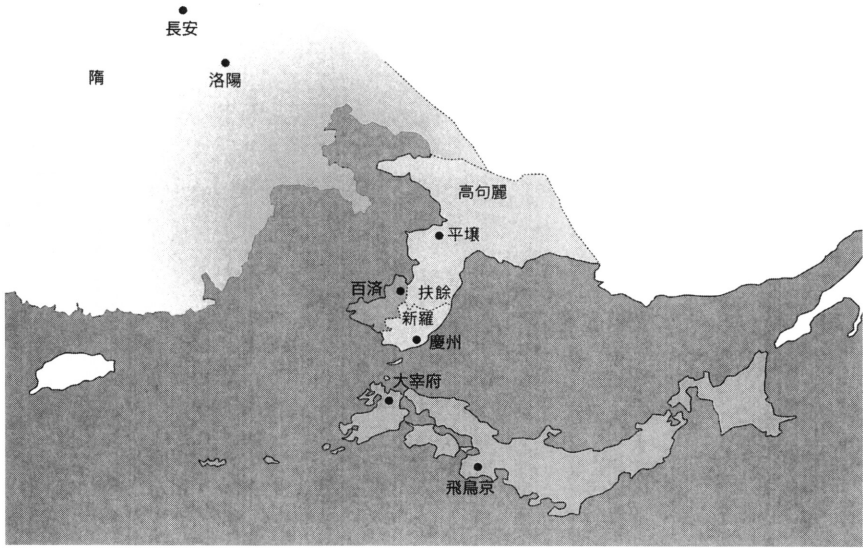
——万葉集と考古学——

## はじめに

古代日本の大宰府は、『万葉集』に「あをによし寧楽の京師」と詠われた奈良の都から見て、同じく『万葉集』に「大君の（食国の・天皇の）遠の朝廷」と詠われた。大宰府は、周知のとおり、首都であった奈良から遠く離れた北部九州に設置された拠点的な行政都市であった（第一図）。その主要な機能は、一つには西海道（九州）九国三島を統括する、いわば内政を司ることであった。そして、もう一つには当時の中国大陸の唐や朝鮮半島の新羅との外交を担うことであった。平和時の外交には貿易もしくは貿易という経済活動が付随するものである。しかし、国家間で緊張関係が生じると、国防ときには出兵という軍事行動が伴ったのである。

## 西 谷 正

そのような大宰府の遺跡群は現在、福岡県太宰府市付近の随所に分布している（第二図）。そのうち、大宰府政庁・大野城・水城など特別史跡に指定されている、いわゆる大宰府史跡に対して、福岡県教育委員会は、押し寄せる都市開発に対処する意味もあって、本格的な発掘調査を実施してきた。そのうち大野城と、対をなす同じく特別史跡の椽（基肄）城については、佐賀県の基山町が中心となって調査を進めてきた。また、古代都市・大宰府の条坊や鴻臚館など大宰府関連遺跡については、太宰府市をはじめ筑紫野市・大野城市・春日市・宇美町や福岡市の教育委員会が永年にわたり、史跡整備や開発工事に伴って発掘調査に当たってきた。それらの関連機関による四〇年間以上に及ぶ調査・研究の成果には、測り知れないほどの重要かつ歴大なものがある。そのような成果の一端は、大宰府史跡の発



第一図 七世紀の東アジア

(九州歴史資料館(松川博一編)、2010『大宰府—その栄華と軌跡—』九州歴史資料館開館記念特別展(図録)より)

掘調査を主担してきた福岡県立の九州歴史資料館が、昨年一月二一日に小郡市へ新築、移転、開館した際に、開館記念特別展を催し、広く県内外の皆さんに公開、展示したところである。<sup>①</sup>

大宰府史跡の発掘調査でもっとも顕著なことは、中枢部の政庁が七世紀後半から八世紀初めを経て、一〇世紀後半まで三時期にわたって変遷することと、その中軸線が確認されたことが挙げられる。そのうち、たとえば都府楼跡の名で親しまれる政庁跡には現在、地表に立派な建物礎石群が遺存しているが、発掘調査の結果、天慶四年(九四二)に起った藤原純友の乱の後に再建された第三期のものであることがわかった。つぎに、これまでの推定に反して、政庁前面域が南へ凸字形に突出して広場を形成し、その東西両側が官衙域であったことが明らかになった。

『万葉集』巻五や巻六にそれぞれ詠われた大野山(大城山)の大野城と水城、ならびに、同じく巻四に見える基の山(基肆城)に対しても、史跡整備や災害復旧の工事に関連して発掘調査が行われた。その結果、大野城と水城では、前述の政庁の変遷と対応するかのよう三時期の変遷が認められ、また、それらの構造の解明が進んだ。そのうち、水城に関連して、大伴旅人は神亀五年(七二八)ごろに大宰帥として赴任したが、天平二年(七三〇)に大納言を兼



第二図 太宰府周辺古代遺跡分布図

(筑紫野市史編さん委員会、2001『筑紫野市史』資料編(上)考古資料より)

任して上京するとき、水城のおそらく門のところまで馬を降り、大宰府の館を望み、そして、見送りに来た娘子が二首の歌を詠んでいる。水城には、東・西に門があったが、そのときの門は後述の鴻臚館に通じる西門であったと推測される。水城の調査の一環として、西門跡が発掘された。その結果、七世紀後半のⅠ期は冠木門、八世紀前半のⅡ期は八脚門、そして、九世紀代のⅢ期は二階建ての楼門であったことが推測された。この中で、Ⅱ期の八脚門は大宰府の表玄関に相応しい壮麗な門であったといわれる。大伴旅人が見送りを受けたところは、この西門であったろうか。

さてここで、いわゆる大宰府史跡以外の関連遺跡群のうち、『万葉集』との係わりにおいて、考古学からのアプローチを試みることにしたい。考古学の発掘資料の中で重要な位置を占めるものの一つに木簡がある。その木簡に『万葉集』の和歌が墨書されていることがある。今のところ、滋賀県の宮町遺跡（紫香楽宮跡）・奈良県の石神遺跡や京都府の馬場南遺跡の『万葉集』木簡が知られる。大宰府では、これまでに一三一六点見つかっているが、『万葉集』木簡は未発見である。

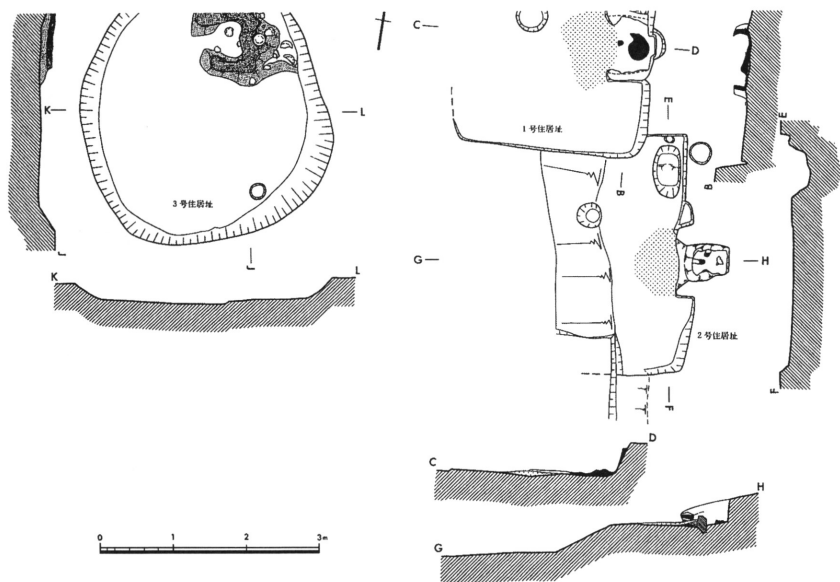
## 一 「貧窮問答歌」に見える伏廬と竈

『万葉集』の巻五には、山上憶良が詠んだ有名な「貧窮

問答歌」が収められている。その中に、「伏廬の曲廬」とあるのは、考古学の知見からして、竪穴住居がひどく傷んでいる様子を彷彿とさせる。そして、「竈」や「甑」についても、竪穴住居の壁際に造り付けられた竈と、持ち運びができる置竈があり、それらに架けられている甑を類推することは容易である。そのような廬と竈の実態は、大宰府市の成屋形遺跡で、大宰府史跡の本格的調査が始まって二年目に当たる昭和四四年（一九六九）に発掘された竪穴住居跡において見ることができ、すなわち、七世紀後半の住居跡内部には造り付けの竈が設置され、また、八世紀後半の住居跡内部からは移動が可能な土製の置竈が出土した（第三図）。

## 二 「梅花宴」の舞台

『万葉集』には、よく知られるように、のちに「筑紫歌壇」と呼ばれるほど、大宰府では歌が盛んに詠まれ、特色ある世界を形成した。その中心人物は、もちろん大宰帥であった大伴旅人と、筑前守であった山上憶良である。大伴旅人は、天平二年正月一三日、帥家つまり府官館の庭園で「梅花宴」を催した。その際に参席した人々が詠んだ梅花の歌三二首が、『万葉集』巻五に収められている。宴には、大宰府の高官をはじめ、高僧・薬師・神司・陰陽師らや、



第三図 成屋形遺跡遺構図

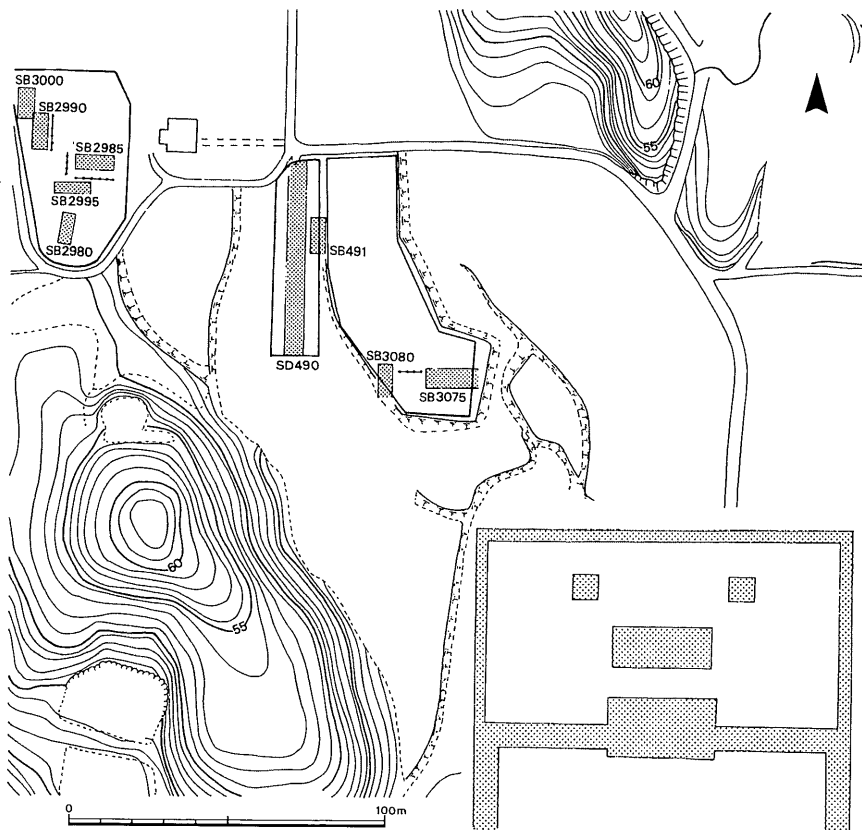
(福岡県教育委員会 (亀井明德編)、1970『成屋形遺跡 古代住居址発掘調査報告』より)

西海道諸国の国司たちが顔を並べている。

ここで、「梅花宴」の舞台となった、大伴旅人のいわば長官公邸はどこにあったのであろうか。早くから郷土史家たちによって、「大裏」という小字名などを参考に、政庁跡の北西約一六〇メートル付近に当たる丘陵に建つ坂本八幡宮の付近ではないかといわれてきた。

そこで、九州歴史資料館では、昭和六一年（一九八六）に大宰府史跡に対する第一〇二次調査として当該地すなわち坂本八幡宮の西側隣接地区を発掘調査した（第四図）。その結果、三時期にまたがって合計五棟の掘立柱建物が検出された。ここでの三時期とは、七世紀後半・八世紀後半・九世紀初頭～前半代にそれぞれ比定される。ただ、大宰帥の館跡に結びつく遺構といえるほどのものではない。当該地に対しては、翌六二年にも第一〇五次調査として実施された。その結果、八世紀前半と後半の掘立柱建物など三棟と南北溝が検出されたものの、帥の館跡との関連性を求めるのは難しい遺構群であることになった。

因みに、延喜元年（九〇一）に大宰権帥に左遷された菅原道真は、五九才で病没するまで大宰府で過ごした。その邸宅は、「南館」と呼ばれた。そこで詠まれた漢詩（『菅家後集』）によると、政庁（都府楼）建物の屋根瓦が望見でき、そして、観世音寺の梵鐘の音が聞こえた。また、道真



第四図 政庁後背地検出主要遺構配置図

(九州歴史資料館(石松好雄ほか編)、1988『大宰府史跡 昭和62年度発掘調査概報』より)

追善のために治安三年(一〇二三)に南館の跡に建てられた浄妙院(榎寺)が起こりと伝えられる榎社の位置などから、榎社付近が館跡と推定されてきた。そこが、平成一二年(二〇〇〇)に第二次の発掘調査が行われたところ、東西方向の二条路の側溝跡が検出された。また、これまでの調査でわかっている条坊復元から、その付近が、道真邸宅跡であった可能性が出てきた。ここは、政庁の南約七〇メートルの地点で、朱雀大路の西側に面し、右郭一坊に当たる。そのようなこともあって、大伴旅人の館跡も前述の政庁後背地よりむしろ、政庁の南側で、朱雀大路に近いところという見解も出されるようになった。

ここで、大宰府からほど近く、梅花宴にも国司が列席した筑後国府を見ると、これまでの発掘調査

で、九世紀代の国司の館跡が見つかっている。すなわち、そこは政庁の東南側に位置し、また、館の内部で遺水と園路の遺構が伴い、そこで「曲水の宴」を催した可能性も指摘されている。西南日本の大宰府とともに、律令国家のフロンティアに当たる東北の陸奥国府としての多賀城において、国司館もしくは国守館は政庁域外つまり城外の南北大路に近く、そこと交差する東西大路に面したところに推測されている。ところ変わって、越中国府の場合、遺跡は富山県高岡市の伏木台地に比定されている。そして、越中国守として満五年間を過ごした大伴家持は、ここで二二三首の歌を詠んでいる。その国守館の場所は、家持の歌群が示す景観や「大立」(大館)の字名などから、伏木台地の北東端で、国庁推定地の北東側つまり裏手に推定されている。国庁と国守館の類似した位置関係は、肥前国府の場合にも認められることは、すでに先学が指摘しているところである。

以上に見てきたような各地の国府(国司)館の類例も参考にしながら、大宰府の府官館の遺跡と、ひいては「梅花の宴」の遺構が引き続き追求されることを期待したい。

### 三 大宰府鴻臚館の位置

古代の大宰府の行政組織には、所・司・院などと称され

る一九の官衙があった。そのうち、律令国家の外交の最前線にあった大宰府にとって、外交使節の饗応を担う蕃客所は重要な位置にあった。そして、その客館が鴻臚館であった。大宰府鴻臚館に関する文献史料の初見は、『日本文徳天皇実録』の巻四に見え、承和五年(八三八)春に、遣唐副使・小野篁が唐人・沈道古と詩を唱和したという記事であるが、その前身は『日本書紀』持統天皇二年(六八八)紀に初見の筑紫館である。その筑紫館については、『万葉集』巻一五にも登場する。すなわち、天平八年(七三六)に、遣新羅使一行が「筑紫の館に至りて遥かに本郷を望みて、懐愴みて作る歌四首」が見える。因みに、大使には、『続日本紀』天平八年二月の条によると、阿倍朝臣継麻呂が任命されている。これら筑紫館・大宰府鴻臚館とともに、新羅や唐との外交に当たって、賓客や大使ら一行の食事饗応と宿舎提供などの接待と饗応を担う客館であった。

ここで、それらの位置をめぐっては、大正四年(一九一五)に、中山平次郎が、さきの『万葉集』巻一五の四首の歌などから推測される地理観を理由の一つに挙げて、当時、近世の福岡城跡に近代に入って設けられた陸軍歩兵第二四連隊の用地内を比定した。すなわち、四首の歌の中にある「志賀の浦に漁する海人」とか、「海辺にして月を望みて作る歌九首」の中に見える「荒津の崎に寄する波」などの表

現が見られることから、志賀の浦が望め、眼下に荒津の崎が見下ろせる場所と推測された。

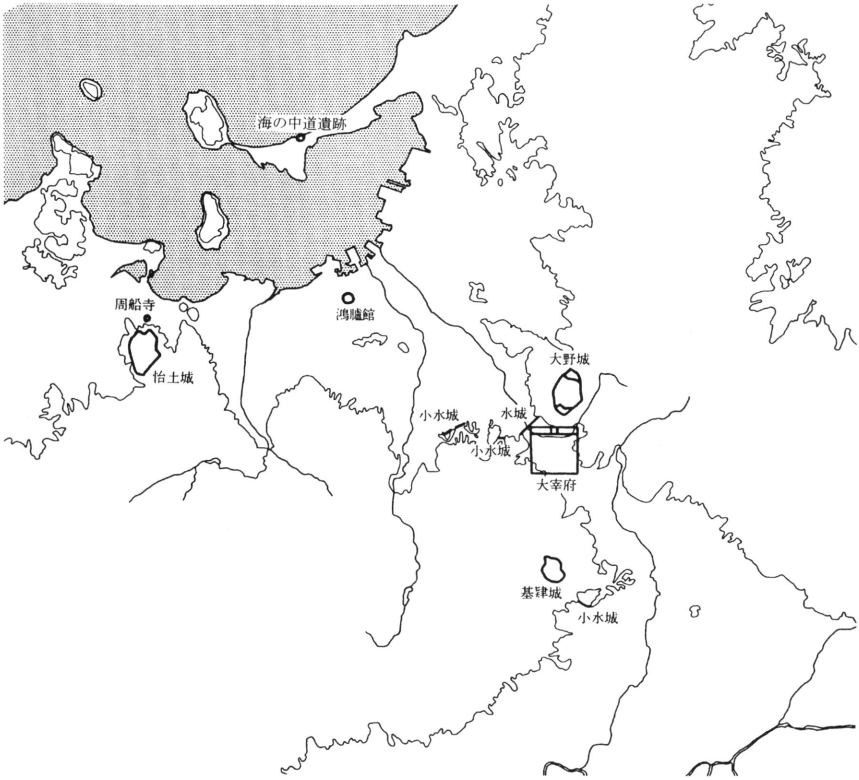
果して、中山の推定から七二年後の昭和六二年（一九八七）には、戦後に平和台球場となった、かつての連隊内から筑紫館と鴻臚館の遺構が上・下の層位で検出されたことにより、幻の客館の遺跡が現実のものとして姿を現したのであった（第五・六図）。発掘調査が進む過程で、重要な遺構や遺物の発見が相つぎ、客館の全容解明に向けて、研究が大きく前進した。その結果、鴻臚館は、七世紀後半から九世紀前半まで、大きく三時期にわたって建物が変遷していることがわかった。そして、時代が下るにつれて、建物の規模や構造が大きくなっていった。さらに、九世紀後半から一一世紀前半まで二時期認められるが、建物の遺構は見つかっていない。その中には、南館の西南隅で検出されたトイレ遺構と見られる堅穴土壇があり、内部から多数の木簡が出土した。因みに、その一つには「庇羅郷甲□煮一斗」と書かれた木簡が見出せる。ここに見える庇羅郷は、『和名抄』に見える肥前国松浦郡の五郷の一つに当たる。『日本後紀』延暦二四年七月の条には、庇良嶋とあり、現在の長崎県平戸島に比定される。

#### 四 博多湾岸の大宰府関連遺跡

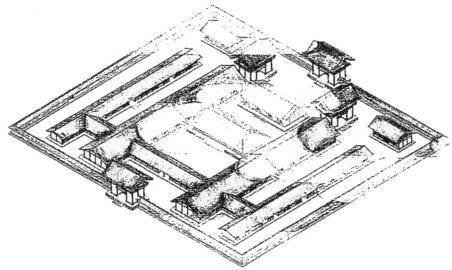
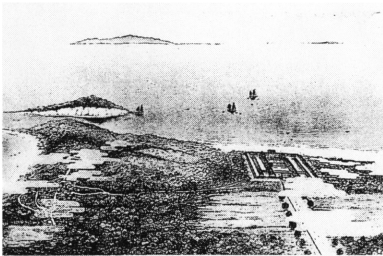
博多湾岸には、鴻臚館跡のほかにも、大宰府の関連遺跡が少なからず分布している。まず、志賀島に至る海の中道の砂浜で、昭和五四年（一九七九）から昭和五六年までの三次にわたる発掘調査の結果、製塩の遺跡が見つかったことが重要である（第七図）。ここでは、八世紀後半の奈良時代から一〇世紀代の平安時代の中ごろにわたる製塩作業の痕跡と思われる焼土層・炉跡や、製塩土器・皇朝十二銭（万年通宝・貞観永宝・延喜通宝）・八稜鏡・帯金具などが検出された。出土品を見ると、一般的な集落とはちがって、官衙との係わりを示すことから、海の中道遺跡が大宰府の主厨所に所属する津厨に当たると推測される。

製塩に関しては、まず製塩土器が出土している。そして、環形動物ウズマキゴカイなど海藻に付着していた微小な動物や貝類の炭化物が大量に検出されたことから、藻塩焼きによる製塩が推測された、すなわち、海藻を乾燥させた後、焼いてできた灰を海水で溶かし、製塩土器で煮詰めたわけである。ここで、海の中道遺跡からほど近いところに位置する志賀島での藻塩焼き製塩を連想する。つまり、『万葉集』巻三で詠われている「志可の海人は藻刈り塩焼き」や、同じく巻一一の「志賀の白水郎の塩焼」などを想起する。

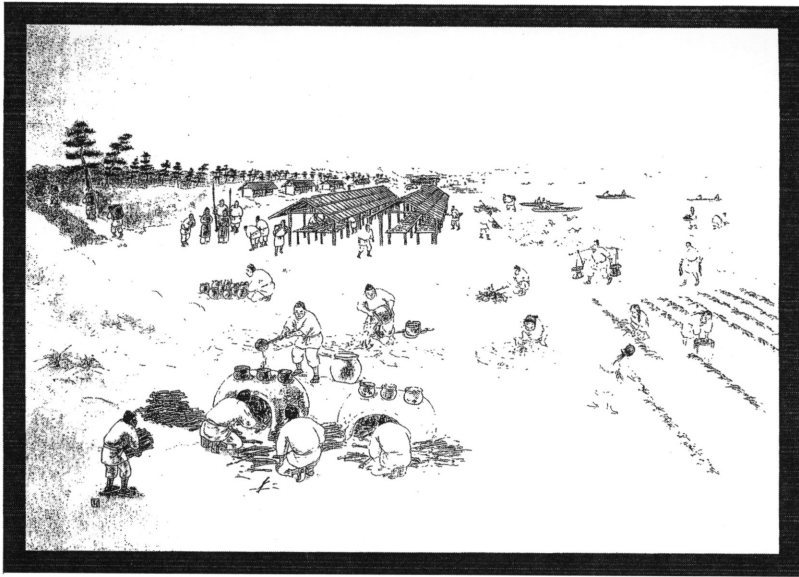




第五図 大宰府の関連施設  
 (九州歴史資料館、1978『甦る遠の朝廷 大宰府展 発掘 10 周年記念』(図録)より)



第六図 左：平安時代の鴻臚館周辺の景観 (想像復元)  
 右：鴻臚館想像復元図 (澤村仁愛知瑞穂短期大学教授による)  
 (福岡市博物館、2007『古代の博多 鴻臚館とその時代』(図録)より)



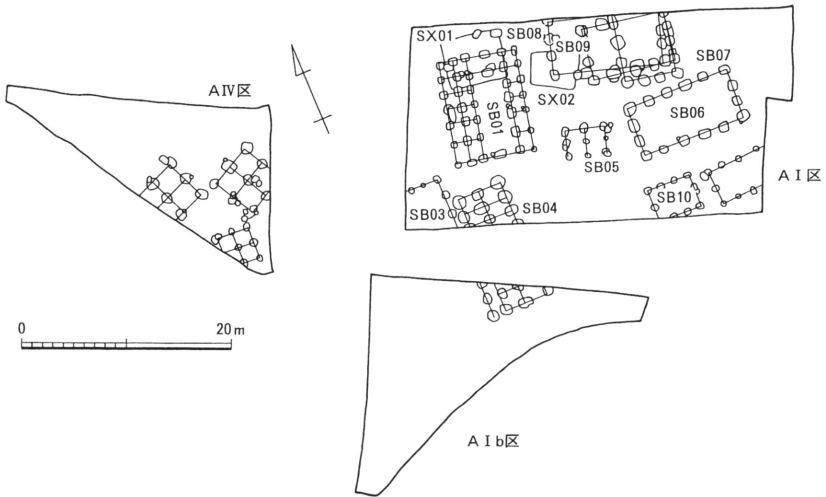
第七図 海の中道での藻塩焼きの風景（早川和子 画）  
 （福岡市博物館、2007『古代の博多 鴻臚館とその時代』〔図録〕より）

なお、海の中道遺跡では、多量の漁労具や魚骨・貝類が出  
 土し、漁労活動も盛んに行われたことがわかる。

つぎに、上述の鴻臚館から大宰府への、そして、大宰府  
 と各地を結ぶ古代官道が随所で調査されている。官道には、  
 三〇里（約一六キロ）ごとに駅家が設けられたこともよく  
 知られる。『万葉集』巻四では、神亀五年（七二八）の大  
 宰少貳石川足人朝臣の転任や、天平二年（七三〇）の大宰  
 帥大伴旅人の大納言転任に際して、それぞれ蘆城駅家で餞  
 の歌を詠んでいる。また、同じく巻八によると、大宰府の  
 上位の役人たちが蘆城駅家で宴を催したときの歌二首が見  
 える。この蘆城駅家については、筑紫野市吉木において昭  
 和五三年（一九七八）の発掘調査時に検出された掘立柱建  
 物九棟が、その関連遺構と推測される（第八図）。

筑前国のもう一つの駅家に、夷守駅家がある。『万葉集』  
 巻四には、大宰大監大伴宿禰百代と、少典山口忌寸若磨が  
 それぞれ駅使に贈った歌二首が収められている。つまり、  
 大宰府から上京する駅使を夷守駅家まで見送り、そこで別  
 れを悲しんで宴を催したときに作った歌である。ここで、  
 夷守駅家について、福岡市東区で発掘調査された多々良込  
 田遺跡がその遺構の可能性が高い。

駅家との関連で想起されるのが、大宰府政庁の後面築地  
 の下層で出土した木簡がある。その表裏には、それぞれ



第八図 上：御笠地区遺跡A地点遺構図

下：御笠地区遺跡A地点の大形掘立柱建物（SB01）

（筑紫野市史編さん委員会、2001『筑紫野市史』資料編（上）考古資料より）

「十月廿日笠志前贄駅寸分留多比二生鮑六十具鯖四列都備五十具」「須志毛十古割軍布一古」と墨書されていた。<sup>(2)</sup>ここに記載された内容は、笠志前すなわち筑前国の贄が、筑前の沿岸部にあつた厨戸から生鮮魚貝類が大宰府への途中に位置する駅で一部を割き留め置かれた後、おそらく主厨司に送られた際の付札と解釈されている。その場合、厨戸の遺跡は、上述の海の中道遺跡であり、また駅は多々良込田遺跡からうかがえる夷守駅家の可能性がある。

『万葉集』ではまた、巻一四や巻二〇に防人歌が少なからず収録されている。そのうち、巻二〇には天平勝宝七年(七五五)に筑紫へ派遣される東国諸国の防人の歌が見られる。このことも関連して、平成一七年に佐賀県唐津市の中原遺跡で検出された甲斐国の戍人すなわち防人の木簡は、大宰府管轄下の肥前国松浦郡大村郷に駐屯した防人に係わる貴重な資料である(第九図)。この木簡で、大村郷の存在が確認された。因みに、『延喜式』には大村駅が記載されている。ここで、中原遺跡が防人の駐屯地とすれば、防人と一体的な関係にあつたのが烽である。烽は、中原遺跡から東北に約三キロのところに見望できる鏡山である。鏡山は、古くから領巾振嶺(ひれふりのみね)と呼ばれてきた。『万葉集』巻五には、天平二年(七三〇)に、筑前国司山上憶良が、領巾麾の嶺に因んで、「遠つ人松浦佐用比売夫恋に領巾振り

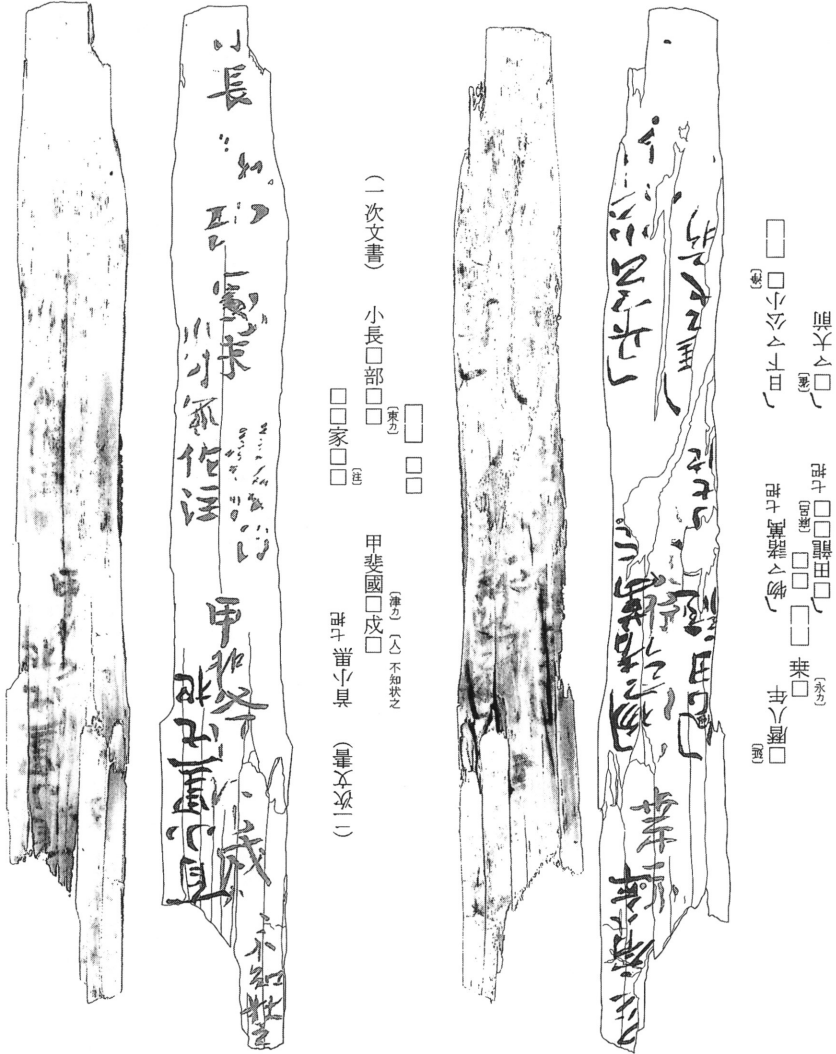
しより負へる山の名」と詠んだ歌を収めている。

#### おわりに

以上のように、西海道大宰府と関連し、筑紫歌壇と呼ばれ、特色ある優れた歌を数多く収録した『万葉集』の中から、いくつかの舞台を取り上げ、それらと考古学的な発掘調査の成果を照合させて検討する試みを行つてみた。私たち九州歴史資料館は、大宰府史跡に対して四〇年以上にわたつて調査・研究を継続し、<sup>(2)</sup>現在も進行中である。そればかりか、大宰府関連史跡が分布する地域の自治体による調査も、同じように進められ、現在も行われている。これら関係機関の調査成果の進展とも相まって、『万葉集』に対する考古学的アプローチの必要性は、今後増してくると思われ、その成果に期待するところである。

#### 注

- (1) 九州歴史資料館(松川博一編)、二〇一〇『大宰府―その栄華と軌跡―』九州歴史資料館開館記念特別展(図録)、九州歴史資料館。
- (2) 九州歴史資料館(岡寺良編)、二〇一〇『大宰府政庁周辺官衙跡Ⅰ―政庁前面広場地区―』九州歴史資料館。
- (3) 九州歴史資料館(岡寺良編)、二〇一〇『大宰府政庁周



第九図 中原遺跡出土「戌人」(防人) 8号木簡  
 (佐賀県教育委員会 (小松讓ほか編)、2009『中原遺跡Ⅲ 5区の調査』(『西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書』6)『佐賀県文化財調査報告書』第179集 より)

- 辺官衙跡Ⅱ―日吉地区―九州歴史資料館。
- (4) 九州歴史資料館(杉原敏之編)、二〇〇九『水城跡―上・下巻―』九州歴史資料館。
- (5) 福岡県教育委員会(亀井明德編)、一九七〇『成屋形遺跡 古代住居址発掘調査報告』福岡県教育委員会。
- (6) 九州歴史資料館(石松好雄ほか編)、一九八七『大宰府史跡 昭和六一年度発掘調査概報』九州歴史資料館。
- (7) 九州歴史資料館(石松好雄ほか編)、一九八八『大宰府史跡 昭和六二年年度発掘調査概報』九州歴史資料館。
- (8) 太宰府市教育委員会(宮崎亮一編)、二〇一一『大宰府条坊跡四―第一五三・一九五・二〇一・二二五・二四三・二六二・二七九次調査―』太宰府市の文化財―第一二三集、太宰府市教育委員会。
- (9) 山村信榮氏のご教示による。
- (10) 久留米市教育委員会(神保公久編)、二〇一〇『筑後国府跡―平成21年度発掘調査報告・概要報告―』久留米市文化財調査報告書』第二九四集、久留米市教育委員会。
- (11) 東北歴史資料館、二〇一〇『多賀城・大宰府と古代の都』特別史跡多賀城跡調査五〇周年記念特別展(図録)、東北歴史資料館。
- (12) 藤田富士夫、二〇一〇『越中時代の相伴家持の歌とその環境』『第一八回春日井シンポジウム資料集』春日井シンポジウム実行委員会。
- (13) 佐藤信、二〇一〇『国府とその関連遺跡』『史跡で読む日本の歴史』四、吉川弘文館。
- (14) 中山平次郎、一九二六『古代の博多(二)』『考古学雑誌』第一六卷第七号、考古学会。
- (15) 福岡市教育委員会(山崎純男編)、一九九一『鴻臚館跡Ⅰ発掘調査概報』『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第二七〇集、福岡市教育委員会。
- (16) 福岡市教育委員会(山崎純男編)、一九八二『海の中道遺跡』『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第八七集、福岡市教育委員会。
- (17) 横山浩一、一九八四『玄界灘式製塩土器(上)』『九州文化史研究所紀要』第二九号、九州大学九州文化史研究所。
- (18) 山崎純男、一九八四『福岡市海の中道遺跡出土自然遺物の検討』『九州文化史研究所紀要』第二九号、九州大学九州文化史研究所。
- (19) 筑紫野市教育委員会(奥村俊久編)、一九八六『御笠地区遺跡 御笠地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査』『筑紫野市文化財調査報告書』第一五集、筑紫野市教育委員会。
- (20) 筑紫野市史編さん委員会、二〇〇一『筑紫野市史』資料編(上)考古資料、筑紫野市。
- (21) 福岡市教育委員会(柳沢一男編)、一九八〇『多々良込田遺跡Ⅱ 福岡市東区多の津所在遺跡群の調査』『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第五三集、福岡市教育委員会。
- (22) 九州歴史資料館(調査課編)、二〇〇二『大宰府政庁跡』九州歴史資料館、および、松川博一氏のご教示に

よる。

(22) 佐賀県教育委員会(小松譲ほか編)、二〇〇九『中原遺跡Ⅲ 五区の調査』(西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書)六)『佐賀県文化財調査報告書』第一七九集、佐賀県教育委員会。

(23) 九州歴史資料館(松川博一編)、二〇一〇『大宰府―その栄華と軌跡―』九州歴史資料館開館記念特別展(図録)、九州歴史資料館。

## 『上代文学』投稿規程

- 1 投稿者は会員に限る。
- 2 投稿論文は原則として縦書きとし、分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。
- 3 ワープロ原稿の場合には、原則として縦書き、一行四十字に設定し、分量は四百行以内(注をも含む)とする。
- 4 投稿論文は、原本を手許におき、コピー五部を送る。投稿論文の表紙には、投稿者の住所および勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。氏名にはその読みをかなで書き加える。
- 5 投稿論文の送り先は事務局とする。
- 6 投稿論文の締切は、六月十五日、十一月三十日の年二度とする。
- 7 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合がある。
- 8 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定し、その結果を通知する。
- 9 投稿論文(コピー五部)は返却しない。
- 10 「上代文学」に掲載された論文等の著作権は執筆者に帰属する。ただし、発行から五年を経過した分については、特に申し出がない限り、上代文学会の責任において順次電子化公開する。
- 11 翻刻・影印などを含む論文等については、「上代文学」への投稿に際し予め所蔵者から電子化公開の許可を得ておくこと。許可が得られない場合も投稿を妨げないが、その旨を原稿の末尾に明記するとともに、非公開とする箇所を明示すること。
- 12